

# 新たな杜の都に向けて

1. まちづくりの理念
2. 目指す都市の姿

# 1

## まちづくりの理念

### 挑戦を続ける、新たな杜の都へ

#### ～“The Greenest City” SENDAI～

社会を取り巻く環境が大きく変化する中、これからも仙台が輝き続けるためには、仙台ならではの強みを活かして挑戦を重ね、新たな価値を生み出していくしなやかさとダイナミズムが必要です。

仙台藩初代藩主の伊達政宗公が築き、現代にも通じる町割りの礎ともなった城下町をはじめ、様々な文化や風土が生まれてきたこのまちの歴史資産は、私たちの誇りです。そうして連綿と受け継がれてきた「杜の都」のまちづくりを基盤として、世界からも選ばれるまちを目指していきます。

※1：都市機能  
都市に備わる住宅、交通機関、  
商業施設、福祉施設、子育て施  
設、コミュニティ施設等の機能。

仙台にはいくつもの個性的な特色があります。自然と都市機能<sup>※1</sup>が調和する「杜の都」の「環境」、ともに支えあい、より良い暮らしを追求してきた「共生」の理念、多くの若者や教育機関が集積する「学び」の風土、持続可能な「活力」を生み出す中枢機能と広域性。こうした都市個性は、困難な状況に直面してもなお、より良いまちを目指し、行動を起こしてきた人々の力によって培われてきたものであり、協働によるまちづくりの積み重ねもまた、かけがえのないこのまちの財産です。

私たちは、仙台がこれまで培ってきた都市個性を深化させ、掛け合わせ、相乗効果を生み出すことで「杜の都」を新しいステージに押し上げる挑戦をはじめます。このような想いのもと、まちづくりの理念として、「挑戦を続ける、新たな杜の都へ～“The Greenest City” SENDAI～」を掲げます。

持続可能な未来へ。「杜の都」と呼ばれる仙台のまちを、世界に誇れる場所として未来に引き継ぐため、「杜の都」と親和性のあるGreenという言葉に、私たちが大切にしていきたい様々な意味を込めました。そして常に高みを目指す姿勢の象徴として、最上級を表す「est」を付した“The Greenest City”というまちづくりの方向性を定め、仙台らしさが輝く「新たな杜の都」をつくっていきます。

# 2

## 目指す都市の姿

### 都市個性 環境（自然と都市機能が調和した都市環境）

#### これまでの歩み

伊達政宗公は広瀬川中流域にまちを築いていく中で、飢餓対策や建築資材確保のために植樹や菜園を奨励しました。城下町に広がった緑は、寺社林、丘陵地の森林、海手の農地へと連なり、仙台は緑で囲まれた美しいまちを形成していました。そして明治末期頃、緑が色濃く残る城下町の景観を指して、仙台は「杜の都」と呼ばれるようになったと言われています。この言葉には、緑豊かな都市環境という意味はもとより、「人々が丁寧に手入れをしてきた緑こそが仙台の宝」という市民の想いが込められています。

戦災により、都市部の緑の多くは失われましたが、青葉通や定禅寺通へのケヤキの植樹や都市公園の整備などを通じて「杜の都」の再生は進められました。高度経済成長期<sup>※2</sup>に都市環境が悪化する兆しを見せた際にも、市民の力で青葉山や広瀬川などの美しい自然や生活環境は守られてきました。こうした、まちに杜を育む理念は今日まで受け継がれています。そして、このような自然と調和した都市環境を実現するため、都市機能の集約を進めることで、環境負荷が小さい持続可能な都市づくりを推進してきました。

#### 未来へ

「杜の都」の理念に、東日本大震災の経験と教訓を踏まえた防災や環境配慮の視点を織り込み、「防災環境都市<sup>※3</sup>」として安全で安心して暮らすことができるまちづくりを進めています。住みよい暮らしの実現のために、市民一人ひとりの力で困難を乗り越える「杜の都」の理念は、このまちの原点です。世界的にも、災害の多発や環境問題への対応は大きな懸念事項となっているため、自然が持つ多様な機能を利用して暮らしの基盤を築くグリーンインフラ<sup>※4</sup>を充実させ、エネルギー効率の高い自然環境と調和したまちづくりを進めていきます。

Green ⇒ 自然 (Nature)

### 杜の恵みと共に暮らすまちへ

- 「杜の都」の豊かな自然と、市民の暮らしや都市機能が調和した、世界に通用する風格を備え、住みよさを実感できるまち
- 「仙台防災枠組2015-2030<sup>※5</sup>」の採択地にふさわしく、自然と人の力を活かした災害対応力を備え、国内外の防災力の向上に貢献できるまち

※2：高度経済成長期  
1960年代から1970年代にかけて、日本が急速に経済成長（経済成長率約10%）を遂げた期間。

※3：防災環境都市  
仙台市が歴史の中で築き上げてきた、豊かな自然と市民の暮らしや都市機能が調和した「杜の都」としてのまちづくりに、東日本大震災の経験や教訓を踏まえて、防災の視点を織り込んだ都市のあり様を示すスローガン。安全に安心して市民生活や経済活動を営むことができる、持続可能な魅力あるまちづくりを国内外に発信し、都市の価値を高めていくための取り組みを進めている。

※4：グリーンインフラ  
コンクリート等の人工構造物による従来型の都市基盤（グリーンインフラ）に対して、良好な景観形成やヒートアイランド現象の緩和、水害リスクの低減など、自然環境が持つ多様な機能に着目し、それを都市基盤として活用するという考え方（取り組み）。

※5：仙台防災枠組2015-2030  
2015年3月に、国連が主催し、仙台市で開催された「第3回国連防災世界会議」の成果文書。2030年までの国際的な防災の取組指針であり、防災の主流化、事前の防災投資などの新しい考え方を提示し、女性や子ども、企業など多様な主体の役割を強調したことに特徴がある。

都市個性 共生（市民の力で築き上げてきた共生社会）

※1：生活圏拡張運動

1969年に仙台市で一人の車いす利用者と一人の学生ボランティアから始まった福祉のまちづくり活動は、1970年に大阪市で開かれた万国博覧会での施設改善をきっかけに全国的に展開され、その後、全国各地の障害のある方によって自発的な身体障害者の生活環境の改善運動に至った。仙台市から始まり、全国展開に至ったこの一連の運動。

※2：身体障害者福祉モデル都市

生活圏拡張運動の全国的な広がりを踏まえ、厚生労働省（当時は厚生省）が1973年に開始した身体障害者のための生活環境の改善を図る「身体障害者福祉モデル都市事業」で、仙台市は第一号に指定されている。

※3：バリアフリー

障害のある方、高齢者、妊婦や子ども連れの人をはじめとした全ての方々が社会生活をしていく上でバリアとなるものを除去し、新しいバリアを作らない共生社会の実現に向けた概念であり、物理的な障壁のみならず、社会的、制度的、心理的なすべての障壁に対処するという考え方。

※4：梅田川の清流を取り戻す運動

仙台市では1960年代前半からの急速な市街地化に伴う、家庭や事業所からの汚水流入の増大やごみの投棄に起因した河川等の水質汚濁が問題となっていた。特に深刻だった梅田川流域では、1964年に保健所職員と老人クラブ有志によって清掃活動が開始され、翌年の地域住民らによる河川浄化運動、その後の仙台市全域の運動へと拡大した。この運動は、行政と協調する形で市民運動が展開される仙台市の特徴を作っていた先駆けの取り組みの一つとされている。

※5：脱スパイクタイヤ運動

1960年代に開発されて急速に普及したスパイクタイヤの使用により発生する粉じん被害を改善しようと、仙台市で全国に先駆けて取り組んだ市民運動。行政にのみ責任を求めるのではなく、市民も自らの責任を受け入れ、環境保全を選択する広範囲な合意を形成した新しい市民協働型の運動。1991年には「スパイクタイヤ粉じんの発生防止に関する法律」が施行され、スパイクタイヤの使用が全国的に禁止された。

これまでの  
歩み

1960年代以降、高度経済成長により都市が飛躍的な発展を遂げる中、仙台では人口の過密による衛生上の問題や公害の発生など、生活上の様々な課題が顕在化しました。このような社会背景のもと、障害のある方が「生活圏拡張運動<sup>※1</sup>」を展開し、歩道や公共施設の段差など物理的・社会的な障壁の解消に声を上げました。市民による市政への参加により福祉のまちづくりが進められた結果、日本で初めて身体障害者福祉モデル都市<sup>※2</sup>の指定を受け、バリアフリー<sup>※3</sup>のまちづくりは仙台から全国に広がったと言われています。

同時期には、市民と行政が一体となって、急速に汚濁の進んだ梅田川の清流を取り戻す運動<sup>※4</sup>が行われ、同様の運動が全市に広がりました。また、春先の粉じん公害の解消を目指して1980年代に行われた脱スパイクタイヤ運動<sup>※5</sup>は、県や企業を動かし、国に立法を迫るほどの大きなうねりになりました。2011年の東日本大震災発生時には、町内会やNPO、企業などが持つ強みと支えあいの力が復興の推進力となりました。このように、仙台では市民による行動の積み重ねによって、暮らしやすいまちのあり方が模索され、共生の礎が築かれてきた歴史があります。

未来へ

少子高齢化の進展や単身世帯の増加など、個人や地域を取り巻く環境は大きく変化しています。このような変化の中で、誰もが地域で共生できる社会を構築するためには、年齢、性別、国籍、障害の有無などの多様性を尊重し、認めあう社会が必要とされています。そのような社会を実現するために、一人ひとりが持つ多様性を活かし、多様な立場にある方々と協働を重ねながら、誰もが共生できる環境をつくり上げていきます。

Green ⇒ 心地よさ (Comfort)

多様性が社会を動かす共生のまちへ

- 心と命を守る支えあいのもと、多様性が尊重され、包摂される、誰もが安心して暮らすことができるまち
- 一人ひとりが持つ多様な価値観・経験を、社会全体がより良い方向に進むための力に変えるまち

## 都市個性 学び (一人ひとりの成長につながる学びの風土)

### これまでの歩み

仙台には、大学をはじめとする教育機関が集積しており、多くの若者がこの地で集い学ぶ、豊かな学びの環境があります。古くは藩政時代、藩校養賢堂<sup>※6</sup>や寺子屋などにおける学びに始まり、1872年の学制公布以降には全国で2番目に古い官立学校が設置され、公立・私立を問わず多数の教育機関が創設されました。鎌倉時代から続く伊達家の文芸を尊び好奇心にあふれる気風のもと、豊かな緑によって静寂と清浄に包まれた市街地は学びの場にふさわしく、多くの市民にとって多彩な学びの機会があったことで、このまちは「学都」と呼ばれるようになったと言われています。現在の総人口に占める大学生等の割合も、他の政令指定都市との比較において高い水準にあります。

戦後には社会教育が花開き、社会学級をはじめとした学びの場は市民の力を育み、多くの市民活動の萌芽を支えました。これまで数々の文化人を輩出してきた、質の高い知的資源と、学術・文化を尊ぶ風土、そして、東日本大震災以降の社会貢献意識の高まりは、創意と工夫が求められるこれからのまちづくりにおいて大きな強みとなるものです。

※6：藩校養賢堂  
江戸時代中期に仙台藩が設立した武士の子弟のための学校。江戸時代後期には、藩校の建物の拡大、学科の増設などの学制改革が行われ、一層の充実を見せた。養賢堂からは、学者だけでなく、藩政で活躍する優秀な人材を輩出した。

### 未来へ

子どもたちが安心して健やかに育つことができ、個性に合わせて成長できる環境が何より必要とされています。人生の豊かさにつながる機会や、新しいチャレンジができる機会など、年を重ねても多様な学びの場があることは、まち全体の活力にもつながります。学生が多く、学びの場が充実している学都としての強みを活かすとともに、様々な経験ができる機会を広げることで、次の社会をつくる力を育んでいきます。

Green ⇒ 成長 (Growth)

## 学びと実践の機会があふれるまちへ

- 子どもたちが、個性を尊重されて健やかに育つことができ、地域に対する親しみと学ぶ喜びを実感できるまち
- すべての人に成長の機会があふれ、次の仙台をつくる担い手が育ち、東北や世界の未来にも貢献できる人材を次々と輩出する学びとチャレンジのまち

## 都市個性 活力（東北における交流と経済の広域拠点）

### これまでの 歩み

江戸時代、伊達政宗公は現在の都心部に城下町を築きましたが、それはまちそのものをつくり出す一大事業でした。広瀬川の上流部から引かれた用水は土地に潤いを与え、碁盤の目状の区画は、現代の都心部の骨格として脈々と受け継がれています。こうして、創造から生まれたこのまちでは、新しい技術や知恵を取り込む進取の気風が育まれてきました。文化の面でも、市民の手によって育まれてきた仙台七夕まつりや定禅寺ストリートジャズフェスティバルのように、賑わいをもたらす力として、その精神は息づいています。

一方、仙台は、明治時代から高度経済成長期を経て築かれた広域的な都市基盤を有しており、東北の中核としての様々な都市機能が集積しています。また、都心部だけでなく、東西南北に走る地下鉄や鉄道の沿線では人口の増加が進んでおり、国際的・広域的な交流の拠点となる仙台空港や仙台塩釜港、高速道路などの交通インフラ<sup>※1</sup>環境も充実しています。加えて、東北6県から集まる方々に支えられている人口構造など、仙台の活力は東北地方との深い結びつきの中から生み出されている点にも大きな特徴があり、東北の未来と向きあい、仙台が担うべき役割を見つめ直すことが必要です。

※1：インフラ  
インフラストラクチャー (infrastructure) の略語。一般的には道路や鉄道、上下水道、電力網、通信網、港湾、空港、治水施設などの公共的・公益的な設備や施設、構造物などをいう。

### 未来へ

持続可能な未来をつくるためには、協働と学びを繰り返しながら、まち全体の活力を高めるだけでなく、一人ひとりが持つ創造性や可能性を十分に活かせるように、新しいチャレンジを称賛し、応援する文化を育むことが重要です。都心部をはじめとして、新しいまちづくりが進む変化の兆しを、地域経済や交流活動の活性化につなげるとともに、自治体の枠を超えた魅力あるまちづくりを進めていきます。

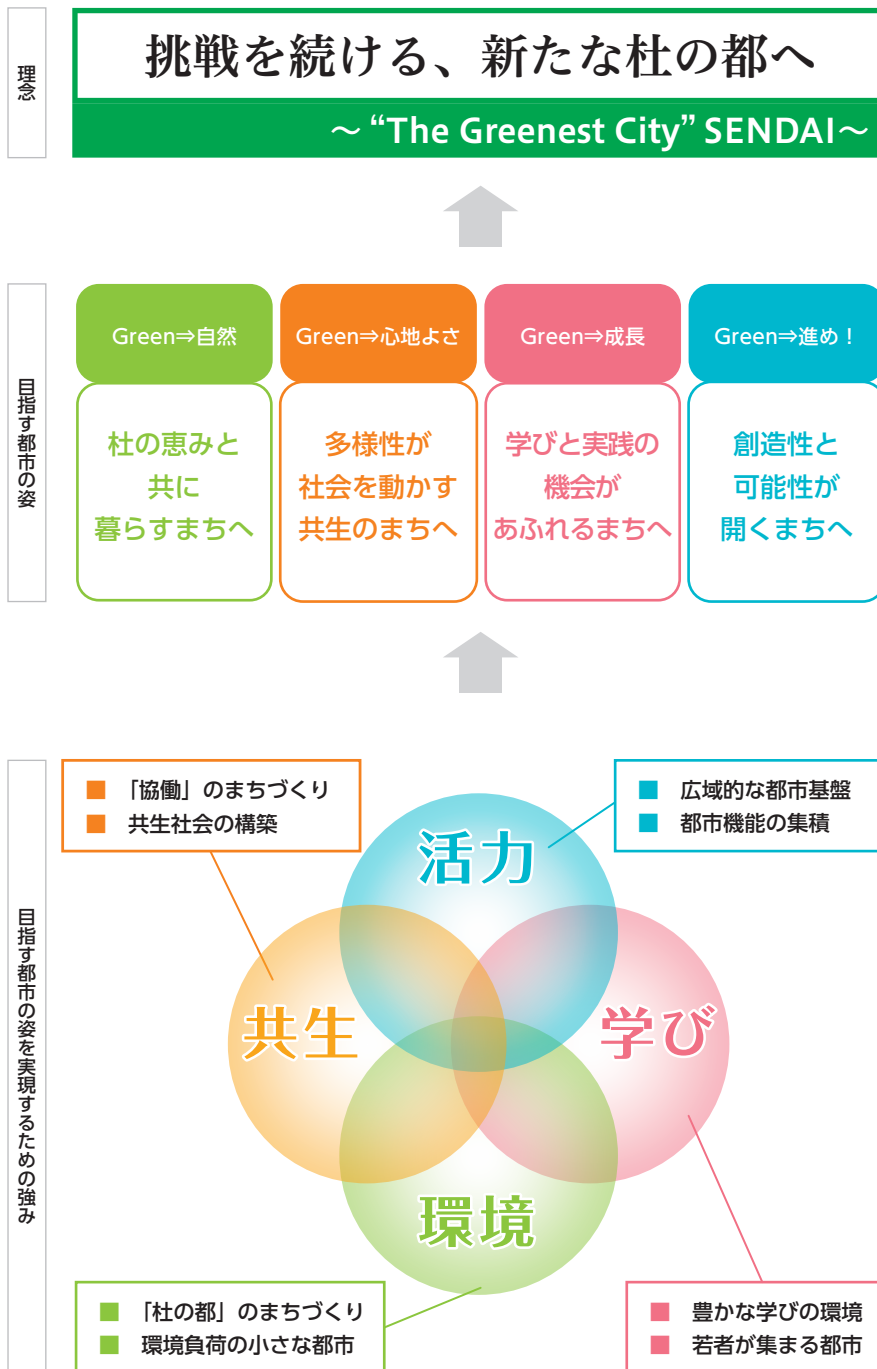
Green ⇒ 進め！ (Green Light)

## 創造性と可能性が開くまちへ

- 企業や起業家等を惹きつけるとともに、新たな価値を生む創造性が開かれ、地域経済の活性化や社会的課題の解決、東北の活力につながるまち
- 東北と世界を結びつけるハブ<sup>※2</sup>としての機能を持つ都市として、グローバルな経済活動や、誰もが楽しめる多彩な交流が生まれるまち

※2：ハブ (ハブ機能)  
車輪などの中心にある構造のこと。一般的には、中心地、結節点などの意味で用いられる。

■ まちづくりの理念と目指す都市の姿の概念図



## 社会の変化に適応しながら、目指す都市の姿を実現するために ～新型コロナウイルス感染症（COVID-19）を踏まえて～

仙台のこれまでの歩みを振り返ると、  
戦災や公害、自然災害など数々の困難を乗り越えながら、  
都市個性を育み、まちづくりを進めてきた歴史があります。

未曾有の被害をもたらした東日本大震災では、  
多くの方々が知恵を出しあい、  
支えあって難局を切り開いてきました。  
このような復興を進めてきた私たちの姿は、世界的にも注目を集め、  
国際的な防災の指針である「仙台防災枠組2015-2030」にも、  
その名が冠されました。

一方、2019年に発生し、世界中に広がった新型コロナウイルス感染症は、  
私たちの生活と地域経済に深刻な影響を与え、  
一人ひとりの暮らし方や働き方も見直されています。  
危機に際しても、安全に安心して生活ができる基盤を守り抜くためには、  
変化の中から新しい可能性を見出すことが求められます。

「杜の都」ならではの暮らしの質に磨きをかけ、  
その魅力を仙台内外に発信し、多くの人を惹きつけること。  
幅広い分野にデジタル技術<sup>※1</sup>を積極的に取り入れるなど、  
社会の変化への対応力をさらに高めること。

仙台が選ばれる都市となるために、  
様々な変化が待ち受けている時代環境だからこそ、協働を重ねて、  
「挑戦を続ける、新たな杜の都へ～“The Greenest City”SENDAI～」  
の実現を目指します。

※1：デジタル技術  
AI（人工知能）やICTなどの  
技術。様々な情報等を数字の  
データであるデジタル情報に変  
えることで、大量の情報の蓄積  
や解析、やり取りができるよう  
になるため、新たなサービスの  
提供やプロセスの高度化などが  
期待されている。